様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 23 年　4 月 28 日現在

機関番号：13201
研究種目：若手研究（B）
研究期間：平成 20 年度～平成 23 年度
課題番号：20730442
研究課題名（和文）　高齢者における適応的な依存の在り方の検討

研究課題名（英文）　Study of adaptive dependence among older people

研究代表者
竹澤　みどり（Midori Takezawa）
富山大学・保健管理センター・講師
研究者番号：90400655

研究分野：健康心理学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：対人依存、自立、高齢者、在宅介護

１．研究計画の概要

年齢を経るにつれ、加齢に伴う心身機能の低下や特定疾患の罹患等のため、日常生活を自身の力のみで維持することが困難となりやすい。このような高齢者においては、他者に依存することが必要となり、より適応的に他者に依存できることが重要となると考えられる。本研究では、そのような高齢者における適応的な依存の在り方、さらにそれらを規定する要因を明らかにすることが目的である。高齢者といっても、心身機能の状態等によって様々に状況が異なり、依存の在り方も状況によって質的に異なることが考えられる。そこで、まず本研究では、在宅で訪問介護を受けている高齢者を対象とし、介護専門職への依存に焦点を当てることとした。

まず初年度である 2008 年度は、より適応的な依存の在り方、それを取り巻く規定因等も含めた仮説的なモデルを得ることが目的であった。そのため、在宅でのホーム・ヘルパー（以下、ヘルパー）利用によく適応している高齢者は適応的な依存の在り方を実践していることを前提に、ヘルパー利用に良く適応している高齢者を対象とした面接調査を実施した。

続く 2009～2010 年度にかけて、主に以下の 2 つの点について初年度で得られたモデルを数量的研究によって実証することが目的であった。一つは、依存の規定因の検討である。初年度の知見をもとに、依存対象者であるヘルパー側の要因である「ヘルパーの介護態度」および高齢者の対人関係に関する特性について検討した。もう一つは、初年度で見出した高齢者の適応的な依存が、果たして本当に適応的と言えるのかを実証するために、介護にかかわる様々な満足感にどのような違いをもたらすのかを検討することであった。さらに、これらの 2 点について質問紙調査によって実証するために、2008 年度の面接調査で得られた知見をもとに在宅要介護高齢者のヘルパーへの依存を測定する尺度の作成も行った。

２．研究の進捗状況

2008 年度は質的研究によって高齢者の依存構造のモデルを提案すべく、面接調査を行った。その結果、高齢者の依存には主体的，能動的にヘルパーに対して依存する「能動的依存」とヘルパーが必要と感じた援助提供を提案し，高齢者が必要と感じた時にそれを受け入れ依存する「受動的・選択的依存」の 2 種類が見出された。後者は，前者の不足分を補う役割を果たしており，高齢者が必要十分な援助を受けることを可能としていることが明らかとなった。その一方で，自分でできるところは自分で行うといった高齢者の自立も見出された。介護場面において，高齢者が自身の意向をきちんと主張することが非常に重要であること、依存と自立どちらも重要な働きをしており、両者がバランスよく共存していることも適応的な依存の在り方であることが示唆された。

2009,2010 年度には、初年度の知見をもとに、それらを実証するべく質問紙調査による数量的研究を行った。具体的には、高齢者の

依存を測定する尺度の作成、依存を規定する要因（援助者側の要因，高齢者の対人関係に関する特性的な要因）についての検討、さらに援助者の仕事、介護全体、援助者との関係のそれぞれについての満足感が高齢者の依存の高低でどのような違いがあるかの検討である。その結果、介護者であるヘルパーが基本的な介護態度ができている方が、同様に高齢者の意向をよりくみ取ることのできるヘルパーの方が、高齢者は能動的に依存しやすいことが明らかとなった。さらに、高齢者の持つ対人関係の持ち方の特徴によっても、依存しやすさが異なることが明らかとなった。また、必要な時にはヘルパーに依存している人ほど、ヘルパーの仕事に対する満足感が高いこと、必要な援助をヘルパーが十分に提案してくれていると感じているほど、介護全体への満足感やヘルパーとの関係満足感が高いことが明らかとなった。このことから、高齢者が必要な時には能動的に依存出来ることの重要性が明らかとなった。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。
（理由）
2008 年度に質的研究によって仮説的なモデルを提案し、2009～2010 年度まではそれらの規定因の検討およびそれらの依存によって様々な介護にかかわる満足感に違いがあるかを検討するという当初の計画通り順調に進展していると言える。

４．今後の研究の推進方策

今年度までは、当初の計画通り研究を進めてきた。しかし、2008 年度の面接調査で見出された適応的な依存の在り方の要素の一つである依存と自立のバランスについては、具体的な示唆を提供できるほどの知見は積み重ねられていない。当初の研究計画では主に依存に焦点をあてたものであったため、この点についての詳細な検討を行うことを主目的とした研究を含めていなかったためである。しかし、これまでの調査研究で得られた知見や学会発表におけるフロアーからの指摘などから、適応的な依存の在り方において非常に重要な点であり、適応的な依存の在り方を明らかにするためには不可欠な点であると考えられる。そのため、この点に関する更なる詳細な検討を行う必要があると考えられた。したがって、当初の計画を変更し、2011 次年度はこの点についてさらに調査研究を行う予定である。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）
①竹澤みどり、在宅要介護高齢者のホーム・ヘルパーへの依存と自立（第 1 報）：ホーム・ヘルパーの介護態度との関連、学園の臨床研究、10、67-74、2010、査読無し
②竹澤みどり、在宅要介護高齢者とホーム・ヘルパー間の依存と自立の構造―修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いた分析から―、ヒューマン・ケア研究、11、70-85、2010、査読有り

〔学会発表〕（計 3 件）
①竹澤みどり、在宅要介護高齢者のホーム・ヘルパー活用の工夫―ホーム・ヘルパーの態度との関連から、日本健康心理学会、2010 年 9 月 12 日、江戸川大学
②竹澤みどり、在宅要介護高齢者のホーム・ヘルパーへの依存と自立―ホーム・ヘルパーの態度との関連から―、日本ヒューマン・ケア心理学会、2010 年 7 月 18 日、日本赤十字大学
②竹澤みどり、在宅要介護高齢者のホーム・ヘルパーへの依存構造―面接調査から―、日本健康心理学会、2009 年 9 月 8 日、玉川大学